

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：33918

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13446

研究課題名（和文）子どもの貧困の連鎖を断ち切る「食でつながるコミュニティ」創出の研究

研究課題名（英文）Research on creating a "food-connected community" that breaks the poverty chain of children

研究代表者

野尻 紀恵 (NOJIRI, Kie)

日本福祉大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：70530731

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：「食でつながるコミュニティ」の現場の実践を丁寧に観察し、記録、分析を行った。学習支援のみでは決して変容しきれない生活の現状を、関わる人の相互作用によって包摂と希望の連鎖に転換させる可能性を検証してきた。研究期間中の5つの調査研究によって、子どもの貧困の連鎖を断ち切るには「食でつながるコミュニティ」に人と人との関係性をつなぐ仕組みが必要であること、地域・学校連携の実践には信頼を基盤としたアプローチが必要であることを示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、福祉教育研究領域において人の変容に着目した研究実践のある研究者と地域における実践者がチームを組み、「食でつながるコミュニティ」の現場に焦点化することで、子どもの貧困の連鎖を断ち切るための具体的な実践アプローチプログラムを提示するという緊急課題に応える研究に挑戦した。子どもの居場所支援については実践の広がりに研究が追いついていない現場があり、その点において学術的意義がある。一方、子どもの居場所支援にとって必要な「人の変容をともなう」プログラムの実際を提示することができた点、学校との連携アプローチ方法の提示ができた点で、社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）： We carefully observed, recorded, and analyzed the practice of the "food-connected community" site. We have examined the possibility that the current state of life, which cannot be completely transformed by learning support alone, can be transformed into a chain of inclusion and hope by the interaction of the people involved.

According to the five researches during the research period, in order to break the chain of child poverty, it is necessary to have a mechanism to connect the relationship between people in a "food-connected community", practice of community and school cooperation. We were able to demonstrate the need for a trust-based approach.

研究分野：スクールソーシャルワーク

キーワード：子どもの貧困 居場所支援 食でつながる コミュニティ エンパワメント 地域ネットワーク 学校との連携 スクールソーシャルワーク

## 1. 研究開始当初の背景

貧困及び子どもの貧困は、戦後継続して社会に潜在してきた問題である。共同募金会の活動や子供民生委員制度、夜間中学校の実践、学童保育、母子世帯への江戸川中 3 勉強会、NPO によるホームレス支援などが隆盛した。2000 年以降、政府が子どもの貧困率を発表し、学習支援は全国的な盛り上がりを見せている。にもかかわらず、子どもの貧困率は高まり、子どもの貧困の連鎖は社会的課題のままである。

平成 25 年 6 月「子どもの貧困対策推進法」が、衆参両院の全会一致で成立した。第 1 条で、「子どもの将来が生まれ育った環境によって左右されることのないよう、貧困の状況にある子どもが健やかに育成される環境を整備するとともに、教育の機会均等を図るため、子どもの貧困対策に関し、基本理念を定め、国等の責務を明らかにし、及び子どもの貧困対策の基本となる事項を定めることにより、子どもの貧困対策を総合的に推進すること」を目的とし、第 2 条では「子ども等に対する教育の支援、生活の支援、就労の支援、経済的支援等の施策」を講ずるとしている。生活保護法や生活困窮者支援法のように、経済的困窮への対処を目的・内容とする法律はこれまでもあった。しかし、法令の名称に貧困という言葉が用いられた法律は「子どもの貧困対策推進法」が初めてである。その意味では、画期的な法律の成立である。

子どもの貧困対策推進法は、第 1 条と第 2 条において、子どもの将来がその生まれ育った環境によって左右されないようにするとの理念を確認している。この理念は、貧困の連鎖を断ち切ることを表明したものである。しかし日本では今もなお、貧困の原因を当事者の努力不足と決めつけたり、貧困の自己責任論によって当事者の努力による貧困からの脱出を求める考えが根強くある。子どもには自己責任論は用いにくいいため、子どもの貧困には家族責任論がつきまとう。親の自助努力がないために貧困の家庭に生まれたかわいそうな子ども達という同情が起こり、かえって貧困家庭を地域から孤立させたり、排除したりしかねない。

このように、貧困を自己責任論で捉えがちな日本において、子どもの貧困対策推進法の第 1 条および第 2 条で貧困の状況にある子どもに対して公的な支援をしていくことを確認した意義は大きく、貧困の連鎖を断ち切るのは最重要課題であることは間違いない。しかしながら子どもの貧困率は伸び続けており、平成 26 年に出された「子供の貧困対策大綱」では学校をプラットフォームとした対策として学習支援と SSWer の配置充実がうたわれた。しかし、その具体策は明記されていない。このような状況の中、子どもの貧困への実践的な取り組みの場の積み重ねとアプローチプログラムの提示が急がれる。

研究代表である野尻は、スクールソーシャルワーカー(以降 SSWer)の実践経験と、SSWer へのスーパービジョンの蓄積がある。実践の分析により、子どもが表す行動(不登校、非行、暴力行為、いじめ等)の背景に貧困が存在することを明らかにした(野尻 2014)。また、子どもの貧困の連鎖を断ち切るには、生活支援 エンパワメントアプローチ 子どもの自己肯定感獲得 学習支援 進路保障、というプロセスが有効であることも明らかにしてきた(野尻 2014)。貧困に育つ子どもの、生活支援 エンパワメントアプローチ 子どもの自己肯定感獲得のプロセス支援は家庭や学校だけでは難しい。地域の試みである「食でつながるコミュニティ」の実践と学校との連携による「地域の子ども」育てが効果的なのではないかと考えられる。

そこで本研究では、これまで福祉教育研究領域において人の変容に着目した研究実践のある研究者と実践者がチームを組み、「食でつながるコミュニティ」の現場に焦点化することで、子どもの貧困の連鎖を断ち切るための具体的な実践アプローチプログラムを提示するという緊急課題に心える研究に挑戦した。現場実践を丁寧に観察し、記録・分析を行うものである。図 1 の様に学習支援のみでは決して変容しきれない生活の現状を、関わる人の相互作用によって包摂と希望の連鎖に転換させる可能性を検証し、実践アプローチプログラムとして示すことによって、アプローチのあり方を地域に具体化する試みが必要である。

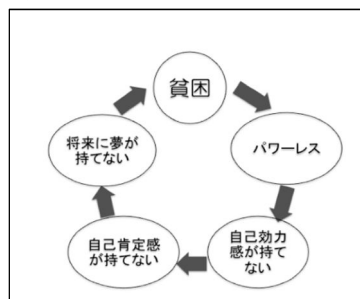


図 1：子どもの貧困の現状

## 2. 研究の目的

子どもの貧困の状況が問題になって久しい。生活保護世帯への学習支援は地方自治体が予算を組んで取り組み、中学生の進路決定などの効果がみられる。しかし、貧困の状況は多様であり、対象を限定した学習支援だけでは十分ではない。地域と学校連携による継続的な生活支援の取り組みが必要であると考えられる。本研究では「食」に焦点化し、地域の潜在的な資源が活かされ、多くの人たちが集う「食でつながるコミュニティ」という「場」に起こる人と人との交互作

用、環境が人におよぼす作用に着目し、食コミュニティ創出のプロセスにおける参加者の変容を明らかにすることを目的とする。

子どもの貧困はそれのみで存在することはあり得ず、生家族を単位として現れる貧困を、そこに生きる子どもに焦点化したものである。そうすることによって、貧困に生きる子どもの育ちと発達の保障に必要となる支援を具体的にし、貧困の連鎖を断ち切る実践アプローチが可能となる。本研究では、福祉教育研究領域において人の変容に着目した研究実践のある研究者（教育学および社会福祉学）と実践者がチームを組むことにより、「食でつながるコミュニティ」創出という住民の主体形成を担う社会教育と、地域の生活における「子どもの貧困の連鎖を断ち切る」という課題の解決を担う地域福祉を結びつけ、福祉教育との関連の中で「子どもの貧困」を捉え、「子どもの貧困の連鎖」を断ち切ることに立ち向かう方法を提案する。

「子どもの貧困」対策は、リスクアプローチ（学習支援）のみでは新たな社会的排除を引き起す恐れがある。本研究では、子ども・若者を中心に据えて格差や不平等を解消するという視座からのアプローチを追求し、新たな連帯を醸成するコミュニティ活動や、人と人との繋がりを紡ぎ出し誰もが排除されない地域をつくる実践活動の方法を提案することが期待される。

食でつながるコミュニティ実践事例を聞き取り調査、観察調査し、質的研究方法で分析することにより、次の2点を示す。

「食でつながる」具体的な出来事、イベントを通し、参加者の変容を明らかにする。

「食コミュニティ」で地域と学校がつながり、共に子どもたちを見守り育てることによる子どもの貧困の連鎖を断ち切るエンパワメントアプローチの方法を明らかにする。

### 3. 研究の方法

本研究では、次の5つの調査研究を実施した。

- 研究(1) 学校現場で現れる子どもの貧困の実相を明らかにする事例に関する調査
- 研究(2) 貧困に育つ子どもや家族を対象とした学校や地域での支援に関する実態調査
- 研究(3) 「食でつながるコミュニティ」の先駆的实践事例に関する調査
- 研究(4) 「食コミュニティ」とスクールソーシャルワーカーの先駆的連携事例に関する調査
- 研究(5) 子どもの貧困の連鎖を断ち切る地域・学校連携の実践アプローチのあり方の検討

#### 1 本研究の構造

子どもの貧困の実相および、学校を基盤とした子どもの貧困への支援の実相を明らかにするために、学校現場で支援を行っているSSWerに対してインタビュー調査を実施する。

実践現場での実践知を積み重ねるために、人の変容に着目した研究実践のある研究者と実践者がチームを組み「食でつながるコミュニティ」の現場に焦点化する。現場実践を丁寧に観察（フィールドワーク）、記録、分析（ワークショップ）を行った（図2）。研究チームが現場実践の知を蓄積・分析を行い、その結果については、現場実践者によるワークショップを開催して再分析を行った。それによって、子どもの貧困の連鎖を断ち切るための実践アプローチを具体的に示すことを試みた。

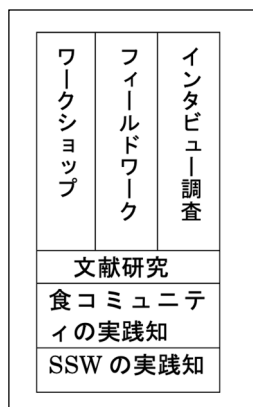


図2：本研究の構造

#### 【平成28年度】

研究(1) 学校現場で現れる子どもの貧困の実相を明らかにする事例に関する調査

全国の教育委員会の中で、子どもの貧困支援を積極的に取り組んでいるSSWerを対象とした、グループインタビュー調査を行い、学校で現れる子どもの貧困の実相を、質的に明らかにした。

研究(2) 貧困に育つ子どもや家族を対象とした学校や地域での支援に関する実態調査

全国の教育委員会の中で、子どもの貧困支援を積極的に取り組んでいるSSWerを対象としたインタビュー調査を行い、学校を基盤とした子どもの貧困支援の実相を明らかにした。

研究(3) 「食でつながるコミュニティ」の先駆的实践事例に関する調査

研究代表者、研究分担者、研究協力者等の人的ネットワークを活かし、「食でつながるコミュニティ」(Sunny Side Standard、山科醍醐子ども広場、子どもの郷、滋賀県縁事業、WAKUWAKU ネットあさやけ子ども食堂、等)を観察・エピソード記録を実施した。その生成プロセスや関わる人の思いに関して、インタビュー調査を実施した。

- 1) 「食でつながるコミュニティ」の生成への思い、プロセスの調査
- 2) 「食でつながるコミュニティ」の様態の記録
- 3) 「食でつながるコミュニティ」のエピソード記録

#### 【平成 29 年度】

研究(3)「食でつながるコミュニティ」の先駆的实践事例に関する調査の継続

5カ所の「食でつながるコミュニティ」の観察・エピソード記録を続け、平成29年度夏に分析を開催した。その後、実践者とのワークショップ研究会を行って再分析を実施した。

研究(4)「食コミュニティ」とスクールソーシャルワーカーの先駆的連携事例に関する調査

前年度の調査で明らかになった実態を踏まえ、SSWerと地域社会資源が密接に連携し、子どもの貧困の連鎖を断ち切るための支援を展開している先駆的事例(Sunny Side Standard)を選定し、調査を実施した。地域や学校と食でつながる支援実践者との連携事例を参加者の変容の視点から分析した。

#### 【平成 30 年度・平成 31 年(令和 1) 年度】

研究(5)子どもの貧困の連鎖を断ち切る地域・学校連携の実践アプローチのあり方の検討

これまでの研究成果を踏まえ、「子どもの貧困の連鎖を断ち切る地域・学校連携の実践アプローチのあり方」を検討し、公表・発信を行う。学校や子どもの居場所支援の現場、SSWerの実践現場へのフィードバックを通して、より実現可能な実践アプローチにブラッシュアップを図った。

## 4. 研究成果

「食でつながるコミュニティ」現場で見聞きして肌で感じ、実感した食でつながることの力、「食でつながるといふことの意味」を、それぞれの事例を読み解き、実践の中にある Living Theory を明らかにしようと試みたことで、その根拠を示すことができた。本研究は実践に焦点化し、実践から学ぶことを研究の中心としてきた。さらに、実践から学ぶ観点を示す際に、これまでの研究知見や理論研究を参照するという試みをした。実践から抽出した Living Theory を誰にでもわかるように説明可能なものにするという試みをした。実践を中心としながらもこれまでの研究知見にも学び、実践と研究が補い合って説明することを試みたものである。

それぞれのコミュニティに集まる人たちが支援を必要としている子どもたちが、食を介して多様につながるといふことは、まぎれもない事実であった。それでは、今回対象とした子どもたちやコミュニティの人たちが食のある居場所になぜ集うようになったのか、なぜ食が必須のツールだったのかということをおぼろげに問い、実践と理論の往還によって以下のように示すことができた。

「食でつながるコミュニティ」の先駆的实践事例として、研究代表者、研究分担者、研究協力者の人的ネットワークを活かし、6事例で調査を行った。Sunny Side Standard(大阪府)、なごみの器(大阪府)、ひらのっ子食堂(兵庫県)、子ども村：中高生ホッとステーション(東京都)、要町あさやけ子ども食堂(東京都)、石部南学区まちづくり協議会にぎわい広場カトレア(滋賀県)の6事例である。観察・エピソード記録を実施すると共に、その生成のプロセスや関わる人の思いに関して、インタビュー調査を実施した。これら6事例の活動は、学習支援など子どもたちへの支援を日常的に行う中で食事支援の必要性を感じ、実施されるようになったものであった。その発見された必要性は、各所でさまざまであった。例えば、栄養を満たすということ、あたたかい手作りの食事を食べるということ、安心して食事をとる時間と場所であるということ、皆で一緒に食べるということ等である。一方、地域の人々にとっても、この場は自分自身が活かされる居場所となるということも見られた。結果として、次の5つの共通点を見出すことができた。

地域に長らく関わってきた人々の子どもたちへの思い

活動にかかわる若い世代が運営の実務を担っている

様々な団体や学校等とネットワークを構築している

活動の内容を必要に応じて創り出している

「食」を通じて関係性が生まれている

以上のような結果は、その場に集う人々にとって活動する「意味」となり、活動の継続性や発展性につながっていると考えられる。

そこで、「食でつながる意味」を、(1)子どもの食の実態はどのようにとらえられてきたのか、(2)人が食べるという営みの位置づけ、という2つのテーマに沿って整理した。(1)においては、孤食(ひとり食べる)の実態に関する調査研究、および家族の食の崩壊についての調査知見、を文献整理した。(2)に関しては、共食の成立に関する研究、および食行動の科学からの知見、を文献整理した。これらの文献で整理された理論を、食でつながるといふ視点から社会的側面に留意して検証するために本研究の実践観察を往還させ、食べさせる喜び、女性の視点の活用、食の文化を伝える、の3点から考察を行い、河村美穂(2018)「人とヒトが食で

つながるといふことの意味」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』31 巻 78-89 として論文発表した。

「食コミュニティ」とスクールソーシャルワーカーの先駆的連携事例に関する調査については、大阪の2事例について関係性を持つことができたため、観察記録した。この2事例は、スクールソーシャルワーカーと地域社会資源が密接に連携し、子どもの貧困の連鎖を断ち切るための支援を展開している実践であった。地域や学校と食でつながる支援実践者との連携により、学校からの参加者も、地域からの参加者も、支援者として一体的なつながりを求める姿への変容が見られた。また、場に参加する子どもたちは、場にいる大人やボランティア学生との交流が変容をもたらす大きな要因であることが示唆された。これらの結果は、野尻紀恵(2017)「スクールソーシャルワーカーからみる子どもの貧困～子ども達への切れ目のない支援をめざして～」『人間と教育』95 巻 45-48 および、野尻紀恵(2018)「食をとまなう子どもの夜の居場所のケース・スタディ：社会関係の紡ぎ直しの検討」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』31 巻 44-58 として論文発表した。

「要町あさやけ子ども食堂」と「夜の児童館」のケース・スタディにおいては、食料分配を旨とする共食文化が有意に諸活動を媒介しており、コミュニティの内なるちからの蓄積に作用しているという仮説を得ることができた。食のある居場所において、地縁コミュニティに適応しつつ、ボランティア・アクションを発動させ、ネットワーク機能を発揮してメンバーの入れ替えと情報を更新し、ボランティア・アソシエーションとしての特長を活かした居場所づくりを拡張させるのである。これらの結果は、田村真広「『要町あさやけ子ども食堂』と『夜の児童館』のケース・スタディ：食のある居場所が有する内なるちから」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』31 巻 30-43 として論文発表した。

「子ども村：中高生ホッとステーション」の実践については、食でつながるコミュニティの視点から(1)食を通じた多様な世代が出会う場としての機能、(2)食が生み出す中高生主体の場と親も含めた生活支援機能、(3)食を通じた役割創出と学習機能、の3点に整理して考察し、さらに、岡村重夫の福祉教育理論で活動分析を試みた。岡村福祉教育理論に基づく、福祉的人間観の理解と体得。社会福祉援助方式の発見の体得。活動者・学習者の外面的理解ではなく内的矛盾に着目する視点。活動者・学習者が批判的学習になっているかの視点、の4点を分析の視点として、考察した。ホッとステーションの実践は、「福祉的人間観の理解と体得」をする場であり、学習支援という居場所を創造して生活支援をしていく「新しい社会福祉援助方式の発見の体得」でもある。さらに、中高生やその家庭が抱えている課題を「活動者・学習者の外面的理解ではなく内的矛盾」として気づき、共有していた。また「学習サポート」に來られない子どもたちの支援を行いたいという「活動者・学習者の批判的学習」に基づいて、学校や行政が充分に取り組むことができていない点に着目して取り組まれている実践である。そして、これらの気づきと学びが「中高生とスタッフの双方向の学び」を生み出していた。まさに「地域共生社会の実現」に向けた実践としても重要な点である。「食でつながるコミュニティ」の3機能の「食を通じた多様な世代が出会う場としての機能」が可視化されている実践であり、食でつながる「出会いの場」「生活支援の場」「学びの場」が中高生と活動者の「双方向型」で実践されていた。これらの結果は、中島修「食でつながる『子ども村：中高生ホッとステーション』の実践の特長と可能性：岡村福祉教育理論に基づく分析を通して」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』31 巻 8-18 として論文発表した。

「石部南学区まちづくり協議会にぎわい広場カトレア」については、食に込められた意味・食を介した実践の独自性を明示するために、まずルーマン理論を社会福祉における一般システム論と比較しつつ整理し、コミュニケーション・メディアには複雑な社会関係の意味を縮減し、行為を拘束する力があることを確認した。その後、事例から「食」がみな違うこととみんな同じことを確認し合うコミュニケーション・メディアになりうることを記述し、その実践から抽出したものが、糸賀一雄の理論と接続できることを示した。複雑性を縮減し行為を拘束することと「この子らを世の光に」という糸賀の理念の共通点を示すことができた。これらの結果は、土屋匠宇三「食でつながるコミュニティにおける「食」の可能性：石部南学区まちづくり協議会にぎわい広場カトレアのケーススタディ」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』31 巻 19-29 として論文発表した。

さらに、上記3年間の研究結果を愛知県におけるスクールソーシャルワーカーの研究会の研修に活かし、その研修で得られた結果と参加者のアンケートに表れた結果をもとに、本研究の実践報告書を「あいちスクールソーシャルワーク実践研究会報告書」として発行した。

本研究では、人と人、人と環境の交互作用による参加者の変容が明らかにされ、子ども自身がエンパワメントされ、自ら自立への道筋を獲得していくプロセスを明示することができた。また、「食でつながるコミュニティ」には、子どもの貧困のみならず、地域の生活困窮者や様々な人を排除することなく包摂することができる「場」となる可能性がある。その「場」での人の変容力を示すことにより、「食でつながる」ことの意味と可能性を提示することができた。

これらの研究結果をもとに実践プログラム化も可能となるため、今後は地域に即した活動リーフレットなどの作成を行なっていく予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 野尻紀恵	4. 巻 31
2. 論文標題 食をともなう子どもの夜の居場所のケース・スタディ：社会関係の紡ぎ直しの検討（特集 食でつながるコミュニティ）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要	6. 最初と最後の頁 44-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 河村美穂	4. 巻 31
2. 論文標題 人とヒトが食でつながるといことの意味	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要	6. 最初と最後の頁 78-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田村真広	4. 巻 31
2. 論文標題 「要町あさやけ子ども食堂」と「夜の児童館」のケース・スタディ：食のある居場所が有する 内なるちから	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要	6. 最初と最後の頁 30-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中島修	4. 巻 31
2. 論文標題 食でつながる「子ども村：中学生ホッとステーション」の実践の特長と可能性：岡村福祉教育理論に基づく分析を通して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要	6. 最初と最後の頁 8-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 野尻紀恵	4. 巻 95
2. 論文標題 スクールソーシャルワーカーからみる子どもの貧困～子ども達への切れ目のない支援をめざして～	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 人間と教育	6. 最初と最後の頁 48-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田賀奈子他	4. 巻 20
2. 論文標題 児童相談所における里親支援の実態とその支援が里親委託率へ与える影響	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 どもの虐待とネグレクト	6. 最初と最後の頁 85-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野口啓示・石田賀奈子・伊藤嘉余子	4. 巻 18
2. 論文標題 社会的養護における措置変更に関する実態調査 子どもの発達に伴う措置変更と子どもの行動上の困難さによる措置変更との比較からの考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 子ども家庭福祉学	6. 最初と最後の頁 81-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野尻紀恵	4. 巻 13
2. 論文標題 災害発生後の学校のレジリエンスのために スクールソーシャルワークの災害への役割	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学校ソーシャルワーク	6. 最初と最後の頁 20-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 野尻紀恵
2. 発表標題 食をともなうコミュニティ創造のプロセスにおける参加者の変容
3. 学会等名 日本福祉教育・ボランティア学習学会第24回あいち・なごや大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石田賀奈子他
2. 発表標題 「里親不調を経験した里親に対する里親養育支援の実態
3. 学会等名 日本社会福祉学会第67回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石田賀奈子他
2. 発表標題 養育困難を訴える里親に必要な支援 里親からの養育困難との訴えから委託解除となった事例の検証
3. 学会等名 日本社会福祉学会第67回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石田賀奈子他
2. 発表標題 里親養育支援の実際とその支援が里親の里親養育支援についての満足度に与える影響
3. 学会等名 日本社会福祉学会第66回秋季大会
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 石田賀奈子他
2. 発表標題 里子及び里親の状況と里子のwell-beingの関連性
3. 学会等名 日本社会福祉学会第66回秋季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石田賀奈子他
2. 発表標題 里親家庭における全国家計調査
3. 学会等名 日本社会福祉学会第66回秋季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石田賀奈子他
2. 発表標題 里親家庭における養育実態に関する全国アンケート調査 自由記述からみた里親への支援ニーズ
3. 学会等名 日本社会福祉学会第66回秋季大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石田賀奈子他
2. 発表標題 16. 学会発表・共同「里親家庭における養育実態に関する全国アンケート調査1-里親家庭の状況の実際
3. 学会等名 日本子ども家庭福祉学会第19回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石田賀奈子他
2. 発表標題 里親家庭における養育実態に関する全国アンケート調査2-里親の幸福度,負担感に焦点を当てて
3. 学会等名 日本子ども家庭福祉学会第19回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石田賀奈子他
2. 発表標題 心理的課題のある子どもの養育プロセスについて～里親の語りの質的分析～
3. 学会等名 日本子ども家庭福祉学会第19回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石田賀奈子他
2. 発表標題 里親家庭における養育実態に関する全国アンケート調査-自由記述と里親幸福度得点の分析-
3. 学会等名 日本子ども家庭福祉学会第19回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石田賀奈子他
2. 発表標題 里親等委託率に対して効果的な里親支援体制の検討 児童相談所および主管課へのアンケート調査結果から
3. 学会等名 日本社会福祉学会第65回秋季大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石田賀奈子他
2. 発表標題 社会的養護における措置変更の実態調査 措置変更における配慮事項に焦点を当てて
3. 学会等名 日本社会福祉学会第65回秋季大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石田賀奈子他
2. 発表標題 社会的養護における措置変更の実態調査 自由記述からの分析
3. 学会等名 日本社会福祉学会第65回秋季大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石田賀奈子他
2. 発表標題 母子生活支援施設における母子分離・母子再統合のプロセス 施設職員へのインタビュー調査からの考察
3. 学会等名 日本社会福祉学会第65回秋季大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 鈴木庸裕編著、大門俊樹、渡邊充佳、野尻紀恵、鈴木ひろ子、瀧野揚三、新井英靖、宮地さつき、土屋佳子、沢田安代	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 223
3. 書名 学校福祉とは何か	

1. 著者名 松本伊智朗他	4. 発行年 2016年
2. 出版社 かもがわ出版	5. 総ページ数 237 ( 130-133 )
3. 書名 子どもの貧困ハンドブック	

1. 著者名 石田賀奈子他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 240
3. 書名 MINERVAはじめて学ぶ子どもの福祉 社会的養護	

1. 著者名 石田賀奈子他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 196
3. 書名 新版 よくわかる子ども家庭福祉	

1. 著者名 石田賀奈子他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 社会的養護内容	

1. 著者名 石田賀奈子他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 216
3. 書名 社会的養護の子どもと措置変更	

1. 著者名 石田賀奈子他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 224
3. 書名 子ども家庭福祉	

1. 著者名 野尻紀恵・鈴木庸裕編著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 学事出版	5. 総ページ数 207
3. 書名 教職経験をもつスクールソーシャルワーカーが伝えたい 学校でソーシャルワークをするということ	

1. 著者名 野尻紀恵、金澤ますみ、奥村賢一、郭理恵、編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 学事出版	5. 総ページ数 127
3. 書名 新版 スクールソーシャルワーカー実務テキスト	

〔産業財産権〕

〔その他〕

上記3年間の研究結果を愛知県におけるスクールソーシャルワーカーの研究会の研修に活かし、その研修で得られた結果と参加者のアンケートに表れた結果をもとに、本研究の実践報告書を「あいちスクールソーシャルワーク実践研究会報告書」として発行した。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	河村 美穂  (KAWAMURA Miho)  (00361395)	埼玉大学・教育学部・教授    (12401)	
研究分担者	石田 賀奈子  (ISHIDA Kanako)  (50551850)	立命館大学・産業社会学部・准教授    (34315)	
研究分担者	中島 修  (NAKASHIMA Osamu)  (80305284)	文京学院大学・人間学部・准教授    (32413)	
研究分担者	田村 真広  (TAMURA Masahiro)  (90271725)	日本社会事業大学・社会福祉学部・教授    (32668)	
研究協力者	岡村 英雄  (OKAMURA Hideo)		

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	軸丸 政代  (JIKUMARU Masayo)		
研究協力者	土屋 匠宇三  (TUCHIYA SYOUZOU)		